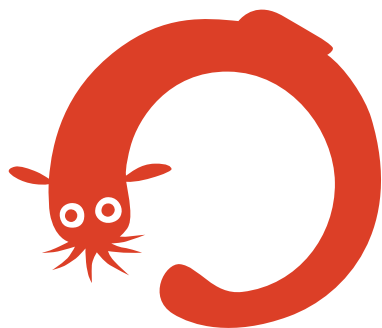


そうかわせみ、



そ  
う  
か  
わ  
せ  
み、

Vol.8



伊藤浩子  
月庭 2



相沢正一郎  
(本は、水のはいった木の桶……) 4



岡島弘子  
水の色 6



一色真理  
夜のバスさん 10

そうか! 14

月庭

ふたたび砕けた

湖の弧に

風を裁く

おさないひとと

引き延ばされた約束を

あため

ととのえ

さかさに聴けば

馬

そして

満潮と

おもいでからも痕跡は消え

おさないまま

今夜

はじめての

乳房となつて

血を洗う

(本は、水のはいった木の桶……)

本は、水のはいった木の桶。桶をのぞきこむと、あなたが目にするのとはたくさん星。……水に刻まれた星座に触り、星の運行を読みながらページをめくると、たちまち一千年。

ベッドで読み終えた本をとじ、水差しに手をのぼす——水は、木の根と石の味がした。……窓をあげ深呼吸し、あなたは夜空を仰ぎ見る。よく朝、木の桶をのぞきこむと、水にゆれてるあなたは赤ん坊の顔、くしゃくしゃの紙屑になつて泣いている。

テーブルであなたはサ行のすずしい気配にやわらかく包み込まれ、ゆつくりと本のページをめくる……雨は、石段をぬらし、敷石をぬらし、理髪店のガラス窓をぬらし、舟をぬらし、庭の芝生をぬらし、墓石をぬらす。

18 ページ目にくものすの珠、46 ページ目にくさの露、62 ペー

ジ目に斜めのすずしい線をよぎる蓑と傘。……蟻蛙がのっそり草葉のかげから這い出してくる84 ページ目——テーブルに本を閉じると、部屋をあちこちに涙のあとみたいなみずたまり。

窓ガラスをつたい落ちる滴のむこうがわには、あかるい空がひろがっていて——あなたは細胞に溜まった水をゆらしながら、静かに椅子から立ち上がる。

古い本の扉をあけると、そこにも古い家の扉。あなたの顔によく似た扉のむこう、黴臭い薄闇、天井には破れた蜘蛛の巣が張つていて……。懐かしいひとの名前を呼びながら、あなたは薄くほこりの敷かれた床を歩く。

あなたの呼吸にあわせて収縮し弛緩する壁、あかるい湯気の窓……。柱時計、(ヘア)の音の出ないピアノ、星座早見、サーベル、錆びついたサモワールなんかページのあいだに葉みたいにはさまれていて、読むことは歩くこと。……黄ばんだページをめくっているうちに、だいどころの籠の濁った水が澄んでくる。階段の途中、まだあなたのあしおとがひびいている。

(連作『風の本』より)

水の色

ねむろうとするとことばがおりてきて  
かがやきながらまわりながら  
雨粒となつてふりそそぐので  
ノートとえんぴつを用意するあいだも  
どれもがたちまちとおりすぎて  
地上につくとすぐに  
ながれて地面にしみこんで  
泣いたあとのように 濡れてすぐ消えてしまう  
やつと書きとめたひとことは

水

そのことばもすぐににじんでいった

水といえば笛吹川と つぶやいたとたん  
またまたことばが奔流となつて  
上流からながれてきて  
私のまえで渦を巻く  
ノートがうばわれそうになる  
急流に足をすくわれ  
おぼれているあいだに下流へ海へとながれ去つてしまうので  
もがいて あわてておきあがつて  
やつとつかんだノートはきれはしだけになっていて

の

ということばだけが書かれていた  
ぐっしょり濡れていた

風にかわかそうとすると  
さらなことばが吹きつけ

---

八ヶ岳おろしとなっておそいかかってくるので  
両手をひろげだきとめようとすのだが

木々をなぎたおし私を吹きたおして  
残ったノートのきれはしをむしりとり  
あつというまにすべてをうばつて去っていった

ひゅゆう

耳の中でまだ吹きあれていることばの嵐の中

色

というひとことだけがなんとか聞きとれた

水の色は

ほんとうの色は……と

いまもそのさぎを書きとめられないままだ

## 夜のバスさん

なんて愚かな夜のバスさん。ぼくを置き去りにして、どこを今頃は走っていらつしやるのでしょうか？

ぼくの目は半開きのドアみたいに疲れきっていて、歩きたびにぎしぎしと頭の中でいやな音がしていた。持っているものといえば、燃えるように赤い裸のニシン一尾だけ。今夜は年に一度の魚祭なんだから、男の子はみんな体のどこかに潮臭いものをぶらぶらさせているはずさ。この町のおとなはそんなぼくらを見て見ぬふりをしてくる。そして女の子といえば、遠吠え歌を合唱しながらスキップをして、赤いニシンが誰よりも早く自分のもとへ届くのを見ていて。まだ尻尾の生えてこないぼくの妹も遠い目をして、あの崖の向こうで声を揃えて歌っていることだろう。水平線では充血した大きな目玉が臭い煙を出しながら、まだ燃えているはずだ。でも、ぼくはも

う町には戻れない。バスはとつとつに出てしまった後なのだから。

なんて愚かな夜のバスさん。一度だけでいい。あなたのいちごのような降車ボタンに触れてみたかった。その瞬間、甘い吐息のような風がぼくの唇を奪っただろう。あなたはああ、あつと大きな声を出し、がたんばたんとして全身で揺れ出し、ぼくは両手の爪を立ててあなたの椅子にしがみついたでしょう。ぼくの持っていたニシンが口から熱い火を噴き、大きな目玉の沈んだ沖の方からは白濁した波濤がぐんぐん近づいてくる。そんなかぼそい夢をぼくは昨日、まぶたを半開きにしたまま確かに見ていたのだった。年に一度の魚祭の前夜の夜には、男の子はみんなシートの中で潮臭くなる。そして女の子はお尻のまわりをむずがゆくするのさ。そんなこと、ちつとも恥ずかしいことなんかじゃない！

なんて愚かなぼく。あなたに乗るたつた一度の機会に乗り遅れてしまふなんて。ぼくはあの崖を越えられないまま、赤いニシンの骨だけを残してぶらぶらさせています。東の空に充血したもう一つの大きな目玉がもつと臭い煙を吐きながら昇ってから、世界は凍りつ

---

いたように動きを止めてしまった。長い長いもう永遠に終わることのない夜にぼくは閉じ込められている。あちらではぼくの妹がふさふさとした尻尾を生やして、まだあの歌を吠えるように歌っているのだろうか。そしてぼくはいつかきつとあの町から戻ってくるだろう夜のバスさんを、ここでこうして半開きの眼窩を砂に埋<sub>ず</sub>めて、いつまでも待ち続ける。あなたに乗るための、最後の一行をまだ書けないまま。



そうか！

今日は世界の終わる日だ。ぼくがトイレから出てくると、同僚たちは黙々とオフィスの中を片づけている。汐招きのサイン入り色紙、鎌鼬のデビューステージの記念写真……。股引姿でデスクの前に戻り、ズボンを引き上げる。ふと、腿のあたりに白い染みがあるのに気づいた。何か恥ずかしいものではないかと不安になり、鉛筆立てからカッターナイフを出して、削り取る。粉末状のものが指の先についた。顔を寄せて嗅いでみると、砂糖のような甘い匂いがある。そのとたん、引き出しの中で何かがごそりと動いた。慌てて取り出すと、ねずみ色の巻貝を背負ったヤドカリだ。たちまち三〇年も前の痛切な思い出がよみがえる。こんな日に今さら……と思うが、刻一刻と前進してくるそいつからもう目が離せない。紅白の縦縞ズボンがすつかり足元にずり落ちてしまったのにも気づかずに。

(一色)

翌朝も、右頬の上に痣はあった。触るとざらついている、周囲の皮膚よりも盛り上がっている。熱も帯びているようだ。これから顔を鏡に映すたびに、これもいつしよに見るのかと思うと不快だった。仕方がない、人生とはそういうものだ。今までなかったものが、それまでなかったからといって、それがこれからもないことの根拠になる訳ではないのだ。私はその痣を、順調に付き合ってきたが、ある日突然別れることになった。私たちの象徴として考えることにした。私たちは不在だが、痣を通して私と繋がっている。そう思うと、僅かだが気分も楽になった。孤独でみすばらしく、ろくでもない老人になりつつある自分を許せるような気がした。安堵さえた。これからはこの痣が私を守ってくれる、ふとそう思って、それからというものは、部屋中に鏡を置き、暇さえあれば痣の様子を仔細に眺めるようになった。(伊藤)

宮沢賢治の詩集『春と修羅』の「序」にこんな部分がある。(気圏のいちばんの上層／ぎらびやかな水窒素のあたりから／すてきな化石を発掘したり)。この部分は二千年後への賢治の理想とする予言だ。この詩は大正十三年に書かれた。しかしあれから六十年もしないうちにその予言は実現した、と小森陽一さんがこの詩の解説の中で述べている。それはいったい何だろうと考え、もしかしたらと思つたものがある。一応挙げてみよう。ノーベル賞受賞の科学者、小柴昌俊氏が発見したニュートリノのことではないか。賢治がこの詩を発表したのが一九百二十年だから、その六十年後は一九百八十年ということになる。この部分の賢治の表現のすばらしさはため息ものだが、賢治の予言の確さにはもつと驚かされた。時代の先端を行き未来を予言するのが詩人本来のありかただとすれば、賢治は、詩人の鑑といえる。(岡島)

眠るまえに、カセットやCDを聞く。それが桂枝雀の落語だったり、小林秀雄の講演だったり、室生犀星や谷崎潤一郎、向田邦子の詩や小説、エッセイの朗読だったり……。

毎晩だから、膨大な量になるけれど、あまり一生懸命に聞くと眠れなくなるから、同じものをなんども聞いている。いつも最後まで聞かずに途中で眠ってしまう。子守唄がわり。

そんな目目が疲れていないときは、枕もとのスタンドをつけて戯曲を楽しむ。(声)が聞きたかったからかもしれない。ベケット、ピンター、別役実——だんだん劇作家が絞られてきた。

三人とも日常会話を使いながら、その(声)がいつのまにか(日常)の不気味さをあぶりだしてしまう。そこに僕はとても詩を感じる。それは夕陽が海に溶け込むように、声が眠りに溶け込む瞬間によく似ている。(相沢)

同人住所

---

相沢正一郎 / 〒189-0024 東京都東村山市富士見町3-17-24

一色真理 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

伊藤浩子 / 〒403-0016 山梨県富士吉田市松山3-4-222-201 宮下方

岡島弘子 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

---

そうかわせみ、Vol.8 2013年2月28日発行

頒価500円

編集：相沢正一郎

発行：そうかわせみ、の会 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302 一色方

印刷：遠藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-9

表紙：相沢育男

---